

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑰

山崎記念館

熊本大学山崎記念館は、一九三一（昭和六）年に熊本医科大学の山崎記念図書館として建設された。建物は二階建ての鉄筋コンクリート造りで、二階開口部方立のデザインに特徴がある。設計をしたのは大正・昭和の建築家で京都帝国大学教授の武田五一である。

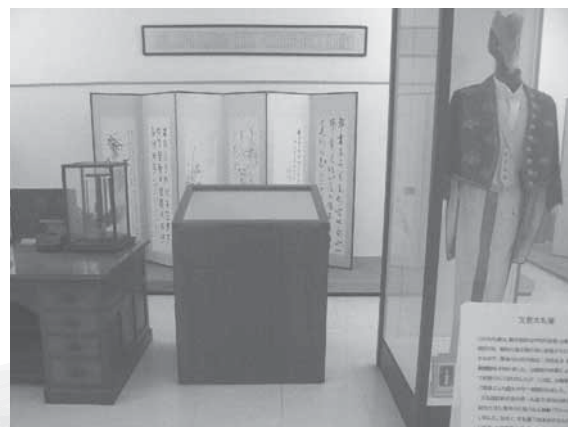
山崎記念図書館建設の経緯については玄関上の碑文に、『本館ハ学長山崎正董ノ功績ヲ顕彰セムカ為山崎博士醫育三十年紀功会ヨリ本大學ニ寄贈セラレタルモノナリ 熊本医科大学』と説明がある。国庫支出建設費と紀功会の寄付金で完成したもので、玄関ホールには山崎の肖像が設置された。山崎正董とは東京帝国大学医科大学卒業後、一九〇二（明治三十五）年に私立熊本医科大学に赴任して、その後は熊本県立医科大学から官立熊本医科大学へと昇格させた初代学長である。

山崎は図書館完成の二年前、一九二九（昭和四）年に官立への昇格を記念して『肥後醫育史』を刊行していたが、これは山崎が熊本に赴任して肥後における医学教育の歴史に興味を持ち、旧藩時代の医家に協力を求めて資料調査を続け、これらをもとにまとめた大著である。こうした調査とともに、山崎は江戸期以来の医学書の蒐集も続けていた。記念図書館が完成すると、山崎はこれらの医学書を寄贈した（山崎文庫）。そして山崎に賛同した旧藩時代の医家たちも所蔵する医学書や医学関係資料などを図書館に寄贈した。これが現在の肥後医育ミュージアムの原点となる（次回）。

一九四五（昭和二十）年七月一日夜半の空襲で熊本医科大学及び附属病院は戦火に遭ったが、ここで焼け残ったのが鉄筋コンクリート製の外来診療所と山崎記念図書館である。戦後も熊本大学附属図書館医学部分館として継続したが、一九六一（昭和三十六）年に医学部基礎講座棟が完成すると、図書館としての役割は終わった。その後は校舎として活用された時期もあったが、一九八一（昭和五十六）年に改修工事が行われて、同年十月十三日に熊本大学の研修宿泊施設・熊本大学山崎記念館となった。一九九八（平成十）年九月



現在の山崎記念館



山崎記念館展示室



山崎正董寿像

二日には建物の歴史的な価値から、登録有形文化財（建造物）に指定された。箱形マッスの構成の建築形態をつくり、水平帯の意匠により全体に統一感を与えた山崎記念館は、造形の規範となるというものであった。これを受けて二〇〇六（平成十八）年の中央診療棟新築の際には、末永く保存することを目的に曳家という手法で四八m移動され、現在の場所に至った。

山崎記念館一階には、山崎の私物や蒐集品の一部を公開する展示室がある。肥後医育ミュージアムが所蔵する山崎関係の品々とともに、医学者として活躍しながら、多趣味であった山崎を偲ぶことができる。

熊本大学医学部肥後医育ミュージアム研究員 松崎 範子

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑬

肥後医育ミュージアム

二〇一六（平成二十八）年は、熊本大学医学部が直接の起源とする一八九六（明治二十九）年の「私立熊本医学校」設立から一二〇周年（昔寿・大還暦）であった。これを受けて熊本大学医学部同窓会・熊杏会では、記念事業として肥後医育記念館展示室の大改装と収蔵庫の設置を計画した。完成したのが肥後医育ミュージアムと昔寿メモリアル収蔵庫である。

肥後医育ミュージアムの前身は、一九七六（昭和五十一）年に肥後医育記念館が完成した後、熊本医科大学山崎記念図書館の収蔵物を引き継いで、熊本における医学教育の歴史を伝える目的で設けられた展示室であった。しかし経年劣化が進んでいたため、一二〇周年記念事業において展示室を大改装し、かつ開館以来増え続けていた医学関係資料を保存して活用する目的のもと、収蔵庫の設置を計画した。しかし二〇一六（平成二十八）年四月に発生した熊本地震で、準備された費用は被害医学生への資金援助や損害が著しかった本荘中地区のインフラ復旧に充当されることとなり、二〇一六年は肥後医育ミュージアムのみの開設となった。昔寿メモリアル収蔵庫は肥後医育記念館に隣接する別棟として、熊本地震から五年後の二〇二一（令和三）年十一月に完成した。肥後医育ミュージアムは昔寿メモリアル収蔵庫の完成で、資料館としての機能を高めることとなった。そして本年、肥後医育において重要な位置を占める古城医学校の卒業生北里柴三郎の新千円札発行を記念して、一階部分に特別企画の展示室が加わった。

肥後医育ミュージアムの展示内容は、熊本医科大学学長山崎正董編著『肥後醫育史』を基調とする。よって展示内容は山崎正董の偉業紹介に始まり、肥後医育の歴史的展開を伝える四つのゾーンからなる。第一が「肥後医育の幕開け」とする熊本藩医学校再春館の時代、第二が「肥後医育における西洋医学の導入」としてオランダ人医師マンスフェルトによる古城医学校時代、第三が「時代の波を乗り越えた近代医学への情熱」としてドイツ医学採用後の熊本における医学校の展開、第四が「守り継がれる医育の炎」として第二次世界大戦後の医学・医療のグローバル時代の熊本大学医学部における



肥後医育ミュージアム展示室



昔寿メモリアル収蔵庫の内部と収蔵品

教育と臨床、以上四期に分けて肥後医育を紹介する。併せて映像を用いて肥後医育の展開をわかりやすく紹介するコーナーも新設した。また館内には初代卒業生である一八九七（明治三十）年卒業の八名から今日まで、肥後医育のなかで巣立った同窓生約一万二〇〇〇名全員の氏名が刻まれている。

昔寿メモリアル収蔵庫の主な収蔵物は、江戸期の漢方の医学書であり、医家に関する資料である。そして西洋医学の導入に対応した古城医学校時代からの医学教育整備の諸段階を伝え、その教育内容を知ることのできる資料や医療器具である。熊本藩の医学校再春館は日本初の公立医学校とされ、十八世紀中期に始まる肥後医育の伝統は極めて深い。肥後医育ミュージアムはその伝統を伝える、医学と医療に特化した資料館である。

熊本大学医学部肥後医育ミュージアム研究員 松崎 範子

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑬

熊薬ミュージアム

薬学六年制開始に合わせて、来学された高校生や卒業生等の皆様に対して熊本大学薬学部（通称・熊薬）の歴史や近況を知って頂くための熊薬百周年記念館史料室（通称・熊薬ミュージアム）は、二〇〇六（平成十八）年四月一日に再整備された（写真1）。記念館玄関ホールに飾られた陶壁「薬草の森」（前田和氏作）は、二〇〇四（平成十六）年六月、本学の薬用植物園から採取したドクダミ、ヒゴシヨウブ、ミント、ミョウガ、シユロカヤツリ、アジサイ、ナンテン、ヨウシユヤマゴボウ、アイラトビカズラ、ムベの十種の薬用植物を柔らかい粘土に自然にあるがままに押し付けて、薬の薬脈一本一本、花びら一枚一枚、根一本一本まで形を取り、素焼きをした後に、植物のわずかな凹凸に彩色し、高温で焼いて作製した草木捺彩陶である（写真2）。

熊薬ミュージアムでは、開学一四〇年以上の歴史をもつ熊薬に関する貴重な資料や珍しい実験器具を展示している。例えば、①年中行事に関わる薬の話題、②熊薬の歴史（写真3）、③薬剤師の職務、

④薬に関わる昔の広告や器具、⑤薬に関わる古文書、☑明治・大正時代の卒業証書や薬剤師免許など、他のくすり博物館では見ることができない資料も展示している。特に、明治・大正時代のサークル活動、修学旅行の様子やキャンパス内にあった製薬工場で学生達が農薬を製造している昭和初期の頃の写真からは当時の学生生活を想い起す。

また、くすり看板、はしか絵（複製）、往診用薬箱、製薬道具、秤類等からは、「昔の薬屋さん」を感じることができる。昭和初期の重要な薬学的研究成果である「有機概念図」の講義用の巻物はここで見れない。

さらに、バーチャルミュージアムとして、展示されていない資料や熊薬の歴史やくすりに関する映像資料もホームページから見ることができる。

熊本大学大学院生命科学研究部 特任教授 入江徹美
熊本大学大学院生命科学研究部 客員教授 甲斐広文



写真1 官立薬学専門学校初代校長・安香堯行先生の銅像と熊薬ミュージアム



写真2 玄関ホールに飾られた草木捺彩陶「薬草の森」



写真3 写真で綴る熊薬の歴史

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待②

熊本大学薬学部薬用植物園

熊本大学薬学部薬用植物園の歴史と取り組み

当園は、熊本大学薬学部の前身である官立熊本薬学専門学校（薬草園として、一九二七（昭和二）年に開設された。この植物園には、旧藩時代の一七五六（宝暦六）年に藩主・細川重賢公により開設された「蕃滋園」に由来する植物（サンザシ、ニンジンボク、サンシユ、テンダイウヤク、モクゲンジ）も現存し、二六〇余年の歴史を現在に伝えている（写真1）。二〇一九（令和元）年からは、熊本大学大学院生命科学研究部附属グローバル天然物科学研究センターの一組織として再編された。また、二〇一五（平成二七）年からは薬学部キャンパスを「薬草パーク」として地域に開放し、近隣住民の方々の憩いの場としても親しまれている。

「薬草パーク観察会」の開催

「薬草パーク」構想の一環で、二〇一六（平成二八）年より一般向けの観察会「薬草パーク観察会」を年間三〜四回開催している（写真2）。この観察会では、園内の植物観察に加えて、専門家による講演、薬草茶の試飲、余剰種苗の提供などを行い、毎回五〇名以上の参加者が集まる人気イベントとなっている。

独自のラベルとオンラインデータベース

園内の展示植物には、効能の解説や含有成分の構造式を記載した独自のラベルを設置している。最大の特徴は、QRコードを付け加えていることで、スマートフォンを使って詳細な情報や追加写真を閲覧できる仕組みを導入している。これらの情報は「植物データベース」としてオンラインでも公開し



写真1 ニンジンボク

ており、学生実習や観察会では大いに活用されている。このデータベースの写真は、企業や出版社、研究者、官公庁などへ提供されている。

保有用植物と研究への貢献

二〇二四（令和六）年十二月現在、薬用植物園には二〇〇〇種類を超える植物が栽培されている。その中には、日本薬局方関係の植物も多数栽培されており、生薬総則に収載されている植物性生薬（粉末生薬を除く）一五六種のうち、一四二種について基原植物を保有している。また、絶滅危惧植物の保全にも力を入れており、日本植物園協会の「地域野生植物保全拠点園」に認定されている。熊本県を中心とした九州の絶滅危惧植物の生息域外保全に積極的に取り組む一方で、これらの植物コレクションを生きた研究材料として、本学だけでなくとどまらず、薬学、農学、分類学など多くの研究者に提供し、科学技術の発展に貢献している。

第28回 薬草パーク観察会

The 28th Seminar on Medicinal Plants at Kumamoto University

日時：令和6年10月12日（土）13:00～16:30（受付・開場12:30）

集合：熊本大学薬学部 大江総合研究棟（熊本市中央区大江本町5-1）

13:00-14:30 講演：『2500年前に遡って、漢方薬がなぜ効くのか？
明らかに！ ―本場の漢・薬食同源とは―』
甲斐 広文（熊本大学 名誉教授）
14:45-15:15 見ごろの植物の紹介
渡邊 将人（熊本大学技術部 薬用植物園担当）
15:15-16:30 植物観察会



主催：熊本大学薬学部
熊本大学大学院生命科学研究部附属グローバル天然物科学研究センター
後援：熊本大学薬学部同窓会、熊本大学技術部、国公立大学薬用植物園長会議

写真2 薬草パーク観察会

熊本大学 技術部 技術専門職員 渡邊 将人
グローバル天然物科学研究センター 教授 三隅 将吾

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待②

熊本大学薬学部薬草ミュージアム

熊本大学薬学部薬草ミュージアムの歴史

熊本大学薬学部薬用植物園では、研究材料として使用されてきた国内外の薬用植物や生薬の標本が長年にわたり保管され、二〇一六（平成二十八）年に始動した「薬草パーク構想」の一環として、薬草ミュージアムを開設した（写真1）。現在、薬草ミュージアムでは、漢方薬に配合される生薬（写真2）のほか、ネパール、ミャンマー、カンボジア、ソロモン諸島、スーダン、トルコなど世界各国から集められた生薬標本を展示している。また、チベット伝統医療に関連する、ブータン由来のタンカ（曼荼羅、薬王および薬王城、薬草などを描いた画）も展示している（写真3）。さらに、奈良時代に正倉院に保存された薬草のリストである「種々薬帳」の写しも見ることができ、献納された六〇種類の薬物名と、その数量および質量などが列記されている。巻末には、「病に苦しんでいる人のために必要に応じて薬物を用い、服せば万病ごとく除かれ、千苦すべてが救われ、夭折することがないように願う」といった願文が記載されている。

熊本大学薬学部薬草ミュージアムの取り組み

このミュージアムで展示されている薬草は、薬用植物園が開催する薬草パーク観察会、薬用植物セミナー、ワークショップ、啓発プログラムなど、さまざまなイベントで教育的な資源として活用されている。これらのイベントには、薬学部の学生、薬剤師、一般の方々、中学生や高校生といった多様な参加者が参加している。参加者はこれらの活動を通じて、薬用植物が日常生活や医療において持つ重要性やその応用について、より深く理解を深めることができる。熊本大学薬学部は、長年にわたりネパールやスーダンの大学や研究機関と研究協力を築いてきた。多くの留学生が熊本大学で薬用植物に関する高度な研究活動を行ってきた。今後も、当ミュージアムは国際的な協力のシンボルとして、自然や薬用植物の重要性について人々に教育する役割を果たすことであろう。

熊本大学大学院生命科学研究部 助教 Hari Prasad Devkota
熊本大学大学院生命科学研究部 客員教授 甲斐 広文



写真1 薬草ミュージアム



写真3 海外の生薬標本及びブータン由来のタンカ



写真2 展示されている生薬標本

旧第五高等学校の生徒募集告知木札

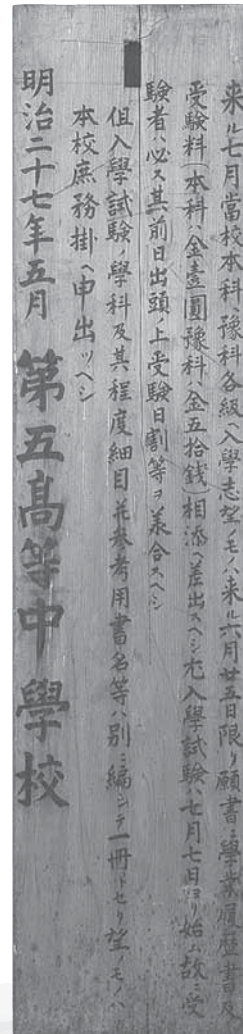
熊本大学五高記念館には二枚の木札が残されている。いずれも旧第五高等学校の生徒募集要領を示したものである。

一枚は、一八八九（明治二十二年）六月、もう一枚は一八九四（明治二十七年）年五月と記されている。明治二十二年のものは、幅約二八cm、長さ約一一cmであり、明治二十七年のものは、幅約三八cm長さ約一六六cmである。どちらの木札にも上部に縦に細長い切り込みが入られ、いずれかの場所に掲げられていたと考えられる。当時の生徒募集を広く知らしめるためには、新聞に募集告知を掲載する方法などが採られていたが、このような木札による告知も行われていたのである。

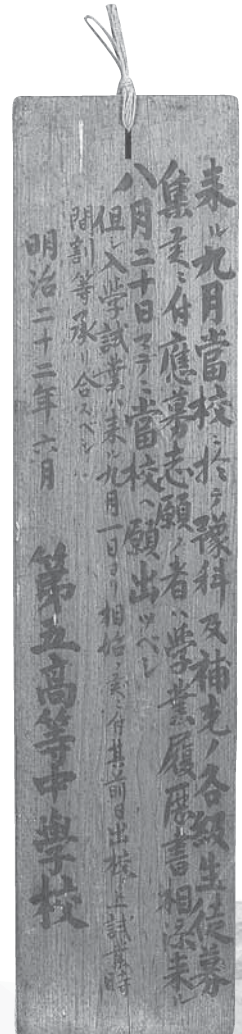
明治二十二年六月は、一八八七（明治二十）年の開校後、まだ熊本城内の仮校舎を使用していた時期であり、七月には本館が完成し現在地へ移転している。一方、明治二十七年は新たに「高等学校令」が公布され、秋の新学期から第五高等学校と改められる年である。

二枚の木札が使用された時期は僅か五年の隔たりしかないが、内容を見るといくつかの変化が見てとれる。箇条書きで掲げていると、いずれも明治二十二年から二十七年にかけての変化であるが、募集される生徒は豫科・補充科から本科・豫科になり、補充科の募集がなくなっている。

- ・願書の提出期限が、八月二十日から六月二十五日になり、試験実施日が九月一日から七月七日になっている。
- ・記載がなかった受験料（本科は金壹円豫科は金五拾銭）の明示がある。（壹円は一円、五拾銭は五〇銭）
- ・記載がなかった試験科目や範囲、参考書などを一冊にまとめた試験要項といったものが用意されている。



明治二十七年の生徒募集告知木札



明治二十二年の生徒募集告知木札

これらの違いについて少し解説を加えると、この時期に募集されていた豫科というのは、高等学校へと変わった後に設けられる大学予科とは違い、入学時の生徒の学力に応じた内容で講義を行い、本科の教育レベルに相應しい学力を養成する目的であったと考えられる。補充科も然りである。高等学校の設置を決めた「中学校令」では尋常中学校と高等学校が同時期に設けられ、尋常中学校から高等学校へと続く進路が確立していなかったことから、様々なところで学んだ生徒が受験した。そのため、明治二十二年の『第五高等学校一覽』を見ると、本科は尋常中学校五年級以下、豫科三級は同二年級以下の学科程度の学力試験と体格検査を受ける必要があると記載されている。

一方、明治二十七年になると尋常中学校を経て入学する生徒が増加したため、「本校設置区域内各尋常中学校の卒業生にして当該学校長の証明書を有するものは試験を須いず本校各専門科及大学予科第一年級に編入すべし」（原文は旧字旧仮名）ということになり、この範疇に含まれない一般の受験生に入学試験が課され、第五高等学校では受験料も必要となった。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構 藤本秀子（五高記念館）

熊本地震と復旧工事

二〇一六（平成二十八）年、四月十四日夜九時過ぎと翌日十五日の夜半（十六日未明）に発生した最大震度七の二度の地震は、熊本県下に大きな被害をもたらした。これほどの大きな地震が連続して発生するのは観測史上例がなく、その後の地震発生時には「同程度の地震が続いて発生する危険性がある」と必ず注意喚起がなされている。

熊本大学の各キャンパスで大きな被害が確認される中、本学の重要文化財建造物にも、倒壊こそ免れたものの、それぞれに大きな損傷が見られた。特に黒髪南キャンパスに位置する工学部研究資料館（文化財名称は熊本大学工学部（旧熊本高等工業学校）旧機械実験工場）は、目視でも明らかなほどの損傷があり、余震が続く中、妻側外壁（この建物の場合に入り口側）のひび割れや桁行方向外壁（この建物の場合側面側）のずれが大きくなって行くのを、日々、不安を抱えながら見ていたことを思い出す。

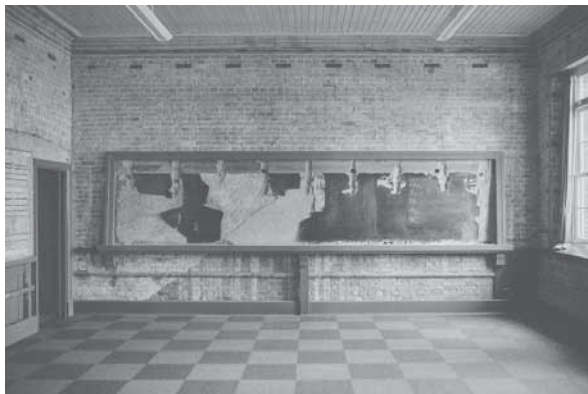
黒髪北キャンパスの五高記念館（文化財名称は旧第五高等学校本館）や化学実験場（同化学実験場）は、一見すると煙突の倒壊や損傷だけであったが、寸分の隙も見られなかった。化粧石の石積みには多くの箇所ですれが生じ、煉瓦積みにも大小の亀裂が見られた。内部は廊下天井のアーチや内壁結節部分の割裂など数えきれない損傷があった。

復旧への動きとしては、他の建物の建て替えや補修工事と並行して、二〇一六年の秋から応急対応と調査、設計が進められ、本格的復旧工事が始まったのは二〇一七（平成二十九）年も半ばを過ぎてからとなった。

工事は、地震前から検討されていた耐震補強案に地震被害を加味した追加補強案の検討を行い、現状復旧と同時に耐震補強も施されることになり、壁厚を利用した引張材挿入補強や煉瓦目地にアラミド繊維を埋め込む横方向への補強などの工法が採用された。また、工学部研究資料館では内



平成二十八年熊本地震で大きなひび割れが生じた五高記念館の二階廊下のアーチ部分



復旧工事の中で発見された建設当初の黒板。壁に布を直張りし、その上に漆を塗って仕上げられている。

部への鉄骨フレームによる補強が、五高記念館と化学実験場では天井裏の水平ブレースによる補強がそれぞれ加えられた。全体の工事は、二〇二二（令和四）年二月末までに終了し、それぞれが本来の姿を取り戻したばかりではなく、二〇一六年と同程度の地震が来ても耐えられるほどの耐震強度を得ることができた。

大きな地震で被害を受けたことは、文化財建造物にとって喜ばしいことではなかったが、復旧工事が進む中で新たな発見もあった。工学部研究資料館では、建設当初、機械類を蒸気タービンで動かしていたが、動力源が代わったために使用されなくなり、埋められていた煙道が確認された。また、改変された会議室や展示室として使用されていた旧ボイラー室や旧蒸気機関室も建設当初の空間が蘇った。五高記念館では、北西の教室に階段教室が設置された痕跡や日本に黒板がもたらされた頃の方法で作られた黒板が発見され、記念館の展示の一部に加えることとなった。

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構 藤本秀子（五高記念館）

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待②④

熊本大学キャンパスミュージアム(まとめ)

熊本大学キャンパスミュージアム推進機構では、「使える・学べるミュージアム」をコンセプトに、キャンパスに点在する展示施設等との連携を密にし、五高記念館に代表される国指定重要文化財等の展示や情報発信等による魅力の向上と博物館機能の充実を図り、キャンパス全体のミュージアム化を進めている。大学が有する歴史的・文化的価値のある建造物や財産を人材養成及び研究推進に活用し、国内外からの訪問者や情報アクセス者に発信・公開することで、海外を含め子供から大人まで本学に関心を持ってもらい、入学や留学先選択、資金提供等の促進を図り、大学運営に寄与するとともに、歴史、文化・伝統の理解と学習に貢献できればと考えている。

【熊本大学写真アートコンテスト2024 受賞作品】



グランプリ「学舎の記憶」
(五高記念館 中央階段)



準グランプリ「絶景」(工学部研究資料館)



キャンパスミュージアム賞「漱石先生の左手で…」(夏目漱石先生の銅像)

取り組みの一つ目が、関連施設等との連携強化である。五高記念館をはじめとする歴史的な建造物に加え、肥後医育ミュージアムや熊葉ミュージアムなど、本学の歴史や調査・研究成果を伝える展示公開施設、図書館や永青文庫研究センター、くまもと水循環・減災研究教育センターなどの調査研究組織などが学内に分散しており、キャンパスミュージアム・コーディネーターを配置するなどして、全学的な連携の強化を進めているところである。

二つ目が、広報・発信の強化である。大学が有する歴史的・文化的建造物、資料及び研究成果について、各種イベントやウェブサイト、ソーシャルメディア等で国内外への発信を行っているが、その活動主体の一つが学生アンバサダーである。関連の様々な活動に関わってもらい、学生・教職員共同でキャンパスのミュージアム化を推し進めている。

三つ目が、常設展示の整備と企画展示の充実である。常設展示の整備については、令和七年十月末を目標に、中核となる国指定重要文化財の展示刷新による魅力の向上と博物館機能(資料の収集・保存・調査研究・展示・教育)の充実を進めている。企画展示についても、令和六年度のアンモナイト展や文化講座、写真アートコンテスト、シンポジウム等につき、令和七年度は連続テレビ小説「ばけげん」に合わせてラフカディオ・ハーンの特別展を計画している。

四つ目が、他大学・外部団体施設との連携である。本学が有する建造物、歴史的・文化的資源や研究資源を、人材養成や研究推進に活用し、大学の歴史及び本学がリードする先進的な研究を広く来訪者に開放・公開するとともに、文化交流や知的情報の交換の場になることを目指している。令和七年度からは東京藝術大学が進める「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」事業にも参画し、「心の豊かさ」のある社会の実現に向け、共に取り組んでいく。

今後とも、「使える・学べるミュージアム」を目指し、様々な取り組みを展開していくため、ぜひご協力をお願いしたい。

文学部附属漱石・八雲教育研究センター



文学部附属国際マンガ学教育研究センター



化学実験場 重要文化財



附属図書館



永青文庫研究センター



表門(赤門) 重要文化財



文書館



本部(旧熊本高等工業学校本館) 登録有形文化財



埋蔵文化財調査センター



くまもと水循環・減災研究教育センター[CWMD]

白川

大江地区

豊肥線

キャンパスミュージアム HP

JR 水前寺駅



m 熊本大学キャンパスミュージアム



キャンパスミュージアムインフォメーションセンター
(五高記念館館内)

五高記念館
重要文化財



黒髪北地区



熊本城

県道337号

3

黒髪南地区



工学部研究資料館
重要文化財



山崎記念館 登録有形文化財

本荘地区



肥後医育ミュージアム



薬草ミュージアム



熊薬ミュージアム



薬用植物園

電車通り



熊本大学キャンパスミュージアム推進機構

<https://museum.kumamoto-u.ac.jp/>

〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

TEL 096-342-2864

(社会共創推進課 TEL 096-342-2047)

e-mail:museum@jimukumamoto-u.ac.jp